

京都大学	博士（工 学）	氏名	高取 愛子
論文題目	ジェフリー・バワの建築思想に関する設計論的研究		
（論文内容の要旨） 本論文は、近代スリランカで活躍した建築家ジェフリー・バワ（Geoffrey Bawa, 1919-2003）の多岐にわたる活動に着目し、設計論的視点から、かれの制作がいかなるものであったかを読み解くことを通してバワの建築思想の構造を解明すると共に、現代の建築設計においてその思想が有する意義と展開の可能性を示すことを目的とした研究である。序章と結章を含め、6章から構成されている。 序章では、本論文の枠組みに関する内容として、次の3点を提示している。①制作における実践的側面と理念的側面との動的な連関によって独自性を獲得するという建築家に固有の思想構造に注目し、建築作品を個別のかつ客観的な事象として検証するのみならず、一方ではそれらを普遍的かつ主観的な建築家の思索へと背景付けて考察することを、本研究の方向性として示している。②バワの建築作品の検証にあたり、図面資料の図式的、計量的な分析と、バワの内的な思索が端的に表明されたものとして定める言説資料の記述的な分析という2つの分析方法を、①に即した具体的な考察方法として提示している。③言説と建築作品についてのバワの言説を概観した上で、それらを論理的、及び身体的な両位相の見地から読み解くことの妥当性を論じると共に、バワの制作態度に沿った論文構成を示している。 第1章では、作品分析に先行して、言説を手掛かりにバワの歴史的、文化的、思想的背景を解明している。つまり、かれの制作における諸概念の構造を、建築の実現に向けた「法則」と鍵語‘life（生活/生命）’との相関のもとで解明している。即ち、①「生活」とは、個々の時代における個別の「生活」と、風土に根ざした「生活」との2つの意味において捉えられており、「変容する社会」に向けた実践的なデザインのためには、これらの相補的構造を建築家が獲得すべき視座として自覚する必要性が説かれていること。②一方で、バワが「建築」を通じて獲得を試みる「生命」とは、顕在化されたものとしての「生活」に向けた眼差しが、「建築家」の存在によって獲得される時、「生活」の潜在的な基底として見定められるものとして把握されていること。③また、このような「生活」から「生命」への遡行的関連は、「建築家」の「感情」と「思想」とが交差する圏域において可能になることが示され、この圏域こそがバワが自覚する建築家の固有性の発揮の圏域であること。④これらを踏まえると、バワが制作の初発的契機を「喜び」の問題として解説し、「喜び」の直観性を‘life（生活/生命）’の重層性と多義性に関連付けて把握していること。これら4つの観点からバワの建築思想の構造の一端が明らかにされている。 第2章では、具体的な成果として結実したバワの建築作品を分析対象とし、独自に開発した複数のダイアグラムを用いた図式的分析手法によって、バワの建築思想をバワに固有の空間構成法における諸特性の観点から解説している。形態的特性、外部内部の接合特性、室の連結特性という3つの側面から抽出された諸特性は、それらの相互関係を横断的に考察することによって、バワが制作を通じて探求し続けた命題として論じられている。端的にその命題は、①機能と形態の関わり合い、②内部と外部の関わり合い、③中間領域化される滞留空間の3つの事柄であり、それらが経時的に重			

京都大学	博士（工 学）	氏名	高取 愛子
なり合っていく過程が明らかにされている。こうした命題の重なり合いは、バワの建築的主題、特に重層化された意味を有する中間領域の成立過程として論述されている。 第3章では、建築はもとより敷地や周辺環境をも包含するランドスケープの概念のもとでバワの建築思想を捉え直している。まず、「人為の介在」が直接なされる「素材」としての「敷地」に関する記述を手掛かりに、ランドスケープに関する諸概念の構造を解説している。即ち、制作者の抱く「心的な像」を淵源に持つ制作における内的側面と外的側面が敷地を端緒として相即するというバワの「作品」が有する構造が、個別性と全体性、差異性と同一性、多様性と同一性などの両義性による重層構造と重ね合わせて解明され、こうした構造こそが、ある「作品」が他でもないその「作品」であることの独自性を獲得するための基盤であることが論述されている。さらに、身体性に依拠することによって奥行き次元への接続を実現する制作概念「人為の介在」が、‘life（生活/生命）’のダイナミズムに寄り添おうとするバワの内的志向に基づくものであり、それが関係性の構築と多様性の実現という方法によって具体化されるというバワの設計方法を明らかにしている。 第4章では、各章において個別に扱った言説と作品のそれぞれに見られる変容をバワの建築思想の生成過程として指摘し、それらを踏まえて本研究の総括として、①バワの空間把握と空間構成、②バワの建築思想における制作の意味、③セレンディピティとしてのバワの制作概念、④可変的な不変性を志向するバワの設計方法、⑤境界面に見出されるバワの設計手法、⑥可変的でありながらサステイナブルなシステム、という6つの観点からバワの建築思想の構造を解明している。 結章では、本論文で得られた成果を要約し、バワの建築思想の構造が、現代の生活環境や地球環境の問題に向かいゆくべき視点を与える可能性を論じている。			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、設計論的視点から、近年スリランカで活躍した建築家ジェフリー・バワの多岐のわたる活動に通底する建築思想の内実を明らかにし、‘life (生活/生命)’を基盤とした建築設計の可能性を探究したものであり、得られた成果は次の通りである。

1. バワの建築作品を、設計論という視点から、建築家の主観性と客観性の両者に依拠しつつ、それらを相対的に記述・分析するという研究方法を提示した。

2. 上記の方法に基づいて、バワの建築思想を論理的、身体経験的な兩位相の見地から解明した。即ち、①作品分析に先立って、バワの言説を手掛かりに、建築の実現に向けた「法則」と鍵語‘life (生活/生命)’との相関を示した上で、かれの歴史的、文化的、思想的背景を把握し、②具体的な成果として結実したバワの建築作品を図式的分析によって読み解くことを通して、固有の空間構成法における諸特性（形態的特性、外部内部の接合特性、室の連結特性）と、かれの建築的主題（特に重層化された意味を有する中間領域の成立過程）について論述し、③バワの「作品」が有する構造と制作概念「人為の介在」について、ランドスケープに関する言説と作品を端緒として理念・実践両面から明らかにした。さらに、④①から③を包括的に論述することによって、バワの建築思想を「バワの空間把握」、「バワの制作の意味」、「バワの制作概念」、「バワの設計方法」、「バワの設計手法」、「バワの環境的配慮」という6つの観点によって構造化した。

3. バワの建築思想を近代的枠組みの新たな一側面として位置付けた上で、バワの思想が有する現代の建築設計における意義、即ち‘life (生活/生命)’の秩序の実現に向けた可変的で持続的な環境の創出、とその展開の可能性を提示した。

本論文は、設計論的視点からバワの建築思想を解説する方法を提示すると共に、その構造解明をしたものであり、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年12月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。